



# 背中合わせの吉田さん

五  
華  
内  
し  
び  
よ



# 目次



「ご苦労さん」

「あっ、こんにちは！」

庭に植えたオンコの木陰（こかげ）から、最初に挨拶（あいさつ）したのは、岩井しゅうじさん68歳。

春を探していたら、挨拶されたのが、吉田まちこさん。年齢は、30うん歳。

2人は、背中合わせの住宅で、おとなり同士（どうし）の間柄（あいだがら）。今いる場所は、背中合わせに挟（はさ）まれた、草木が芽吹（めぶ）く岩井さんの裏庭（うらにわ）。

4月になって、北国にあるこの庭も、もうすぐクロッカスを皮切りに、福寿草（ふくじゅそう）やムスカリ、水仙（すいせん）それからカタクリと、春の開花が矢継（やつ）ぎ早（ばや）です。

庭の緑のほとんどは、中古で買った住宅に、前の家主が残していったものでした。

ところが、「庭や草木を世話して愛（め）でる」そういう趣味（しゅみ）が岩井さんにはありません。

それではなぜ、今もこんなに手入れがゆきとどいているのでしょうか。それは――

お察（さっ）し通り、吉田さんが、代わりに世話をしているからです。

「私、生き生きとしたこの子たちを眺（なが）めるのが、大好きなんです！」

岩井さんは、庭で吉田さんを見つけると、気が向けば挨拶（あいさつ）をしに出てきたり、たまには少しだけ手伝いもしたりします。

「岩井さーん。クロッカスが、ここに出てきましたよ！」

「本当だ。黄色いつぼみだ」

「そことあそこも、出てきますから」

「へえー、分かるんだ。すごいねえ」

「去年の秋に、球根を植えておきました」

「ああ……なるほど」

またある日のこと――

「岩井さーん。アスパラがありました！」

大きな庭石の陰（かげ）に、野菜（やさい）のアスパラが5本。ちょうど食べごろに伸（の）びています。

吉田さんは、それを鎌（かま）で刈（か）り取ると、生のまま全部その場で頬張（ほうば）りました。

「シャキシヤキ、ゴクン。んーおいしい」

岩井さんは、「自分の庭のアスパラなのに」と、少し悔（くや）しい気持ちで眺（なが）めました。

「もう他に無いかなー」

すると今度は、満開のクロフネツツジに近づいて、ピンクの花を摘（つ）んではパクリ、またパクリ。食べてもお腹は、だいじょうぶなものでしょうか。

「吉田さん！ これ以上体重が増えても知らないよ」

岩井さんは、自分の怒（おこ）った声で目が覚（さ）めました。寝室（しんしつ）に掛（か）かるカーテンが、うっすら朝日に浮（う）かぶころでした。

実は、吉田さんは、かなりのおデブさん。「いつも、どれだけ食べるのだろう」、岩井さんは素朴（そぼく）に思います。

当然、口に出しては聞きません。病気なのかも知れないし、少しの食べる量でも太ってしまう、そんな体質なのかも知れないからです。

「こんな日は、池でボートに乗ったら、きっと涼（すず）しいですよ」

8月のとある昼下がりに。岩井さんは、公園の池まで行ってみませんか、吉田さんに

誘（さそ）われました。

北国では、まだまだエアコンの無い住宅が多く、二人の住む家も有るのは扇風機（せんぷうき）だけ。岩井さんは、連日の暑さに嫌気（いやげ）が差していたところです。

「それじゃあ、今日の野良仕事（のらしごと）はおしまい。今すぐ行こうか！」

2人は、あと片付けもそこそこに、近所の公園へと向かいました。

ところが考える事は皆（みな）おなじ。池の船着き場まで来てみると、ボートは1艘（そう）残らず貸し出し中です。

岸から遠く離れた場所で、たくさん浮かんでいるのが見えました。

しかたなく2人は、ボートが戻（もど）って来るのを待つことにしました。

しかし、いくら経っても待てど暮（く）らせど、こちらへ漕（こ）ぎ出すボートがありません。吉田さんのため息が、横でどんどん大きくなるのが分かりました。

「しょうがない！」

なんと吉田さんは、靴（くつ）だけ脱ぐと、池の中へ飛びこんだのです。

「大変だ！」

岩井さんは、慌（あわ）てて池の底をのぞきました。すると、大きな泡（あぶく）がたっていて、そこから潜水艦（せんすいかん）のように、吉田さんが浮（う）かんできたのです。

「ぶはー。さあ、私に乗ってください」

戸惑（とまど）う岩井さんでしたが、せっかくなのでそれならと、仰向（あおむ）けで浮かぶお腹の上に、恐（おそ）る恐（おそ）るまたがりました。

すると、吉田さんの両足がチャプチャプと漕（こ）ぎだして、両腕（りょううで）も開いては閉じて水をかき始めました。

あごを上げ、白目で前を睨（にら）んだ顔が、水面（みなも）を切って進みだします。

そよ風に頬（ほほ）をなでられ、池につかる両足も気持ちが良いくて、岩井さんは、ずっとこうしていたいと思いました。

中島に架（か）かる太鼓橋（たいこばし）をくぐり抜（ぬ）け、木陰（こかげ）の水鳥（みずとり）たちを横目（よこめ）にして、晴れ渡る太陽の下（もと）、吉田さんは快調に池の中を進んでいきます。

「よーそろー！」

岩井さんの陽気な声も聞こえたそのときでした。

中島の陰（かげ）から、すぐ目の前をスワンボート＜白鳥の足漕（あしこ）ぎボート＞が現れたのです。

2艘（そう）は互（たが）いに舵（かじ）を切り、危（あや）うく衝突（しょうとつ）は避（さ）けられました。

しかし、スワンボートが右から左へ過ぎ去る途中（とちゅう）で、船尾（せんび）から次々波の立つのが見えました。

真っ直ぐこちらへ、どんどん大きくせり上がり、波はまるで、巨大な壁（かべ）になって押（お）し寄せます。

「危ない！」

吉田さんは、最初の一波（いっば）であえなく転覆（てんぷく）。岩井さんも、池の水をお腹いっぱい飲みこみました。

「うぷぷ！」

岩井さんは、池の底から浮（う）かび上がろうとして、必死で寝床（ねどこ）を飛び起きたのです。

池の2人の出来事（できごと）は、またも全てが夢（ゆめ）でした。



「長いあいだ楽しい時間を、ありがとうございました」

9月になって吉田さんが、突然こう告（つ）げました。

いつになく礼儀正しくて、岩井さんは、何かあったらどうかと首をかしげます。

話の続きは――彼女が近々結婚をすること。お相手は、ベトナム人の留学生（りゅうがくせい）。10月にベトナムへ行き、ホーチミンという街で、2人は暮らすのだという。

岩井さんは、これも夢（ゆめ）かと疑（うたが）いました。

ベトナムの男性は、アオザイの衣装（いしょう）が似合う、瘦（や）せた女性が好きなのだと、今の今まで信じていたからです。

しかし10月になって、吉田さんが、「いつまでもお元気で」とお別れを言いに来て、岩井さんも「すえ永くお幸せに！」と、改（あらた）めてお祝（いわ）いを伝えました。

こうして吉田さんは、夢のような話だけれど本当に、はるか遠くのベトナムへと旅立ったのです。

岩井さんは最近、インターネットで検索（けんさく）をして、花の名前や育て方を勉強しています。

それに、今年庭の冬囲（ふゆがこ）いや、来年使う道具だとかの下調べをしに、ホームセンターへ足繁（あししげ）く通うようになりました。

あとは――

些細（ささい）な事です。通販（つうはん）で大人気商品だという、夜眠るための枕（まくら）を思い切って買いました。

おかげで、ひどかった肩こりが、楽になった気がしています。

ぐっすり眠れるからなのでしょう、吉田さんが出てくる夢（ゆめ）も、そういえば見なくなりました。

11月に入って、北国は、もうすぐ冬を迎（むか）えます。

岩井さんは今夜から、毛布（もうふ）2枚の上に、羽根布団（はねぶとん）を重ねて寝（ね）ることにしました。

電気を消して寢床（ねどこ）にもぐりこみ、通販（つうはん）の枕（まくら）に頭を沈（しず）めます。

毛布の裾（すそ）を、鼻（はな）の下まで引き上げて――

「ベトナムは、暖（あたた）かそうでいいよなあ」

もごもごと、寢床の中でつぶやく独り言。

冬の到来（とうらい）を知り、岩井さんは、明るくて太陽みたいに暖（あたた）かった友人が、急に懐（なつ）かしくなりました。 【終わり】



---

背中合わせの吉田さん

---

著 しびよ

制作 Puboo  
発行所 デザインエッグ株式会社

---